

巻頭言

人間発達と協同労働 ～第3回子育てフォーラムで問われたこと～

藤田 徹(ワーカーズコープ代表理事)

2012年2月11～12日にNPO法人ワーカーズコープと財団法人こども未来財団の主催による第3回全国子育てフォーラムが東京板橋区にある大東文化大学において開催された。2日間で延べ1200名を超える参加者が全国から集まる大盛況の集会となった。集会で問われたこと、感じたことを述べてみたい。

1. 「地域の再生」に向かう 協同の子育て運動を

あるフォーラム参加者の感想から。

「今回の子育てフォーラムに2日間参加し、私が長年疑問に思ってきた『こんなに一所懸命やっていて実践も他都市に負けない程なのに、札幌の共同保育の運動はなぜ広まらないのか』ということがある程度解きました。共同学童保育は共働きと母子、父子家庭にとってはなくてはならないものです。でもそれは市民のニーズのごく一部であり、関係ない人にとってはあまり興味の持てるものではないでしょう。(というより、不況の中皆自分のことで手一杯で

す。)優先順位の低さとでも言えます。

公園での子どもの声がうるさいと区に訴えたおばあちゃんの話では、昔も子どもの声は聞こえていたけれど、昔は皆知り合いだったからうるさく感じなかったが、今は皆見知らぬ子だからうるさく感じるのではという話。子どもから大人までみんな顔見知りになれる街、「一人の子どもを育てるには村一つが必要」という大田堯先生の話。私自身やはり「共同学童保育命」という想いが強く、地域の大切さも頭では判りながらどこかで私の本物の理念にはなっていないかと思えます。

そして印象深かったのは、接したワーカーズコープの皆さんがとてもイキイキとしていたことです。札幌の共同保育が抱える不安定雇用の問題との差もあるのかとも思いました。私にとってはとても実りのある学びの2日間でした…」(札幌Sさん)

この方に象徴されるような感想が他にも多く寄せられた。それは、地域の再生なしに子どものまともな成長や「子育ての社会化」はないという、ある意味言い古されてきたことであるが、改めてその意味の重さ

が問われた集会だったように思う。(イタリアレージョエミリアの取組みも同様のことを訴えかけていた。)

それは「学校化」された子どもの生活を「地域化」・「社会化」していくことでもある。そんなことを考えた時、戦後教育の金字塔といわれる無着成恭の「山びこ学校」で有名な「生活つづり方教育」のことがなぜか思い出された。地域の生活やあり方を子ども自身が見つめ、生活や地域を変えていく主体者に育てていく、そんな視点と取組みが改めて今日的なテーマとして浮かび上がってきている。

2. 子育て現場からの仕事おこし、まちづくりの新鮮さ

今集会でもう一つ関心を集めたのがワーカーズコープが取り組む協同労働の子育てによる仕事おこし、まちづくりの取組みだった。

学童クラブに通う障がい児の多さや卒業後の居場所の切実な必要性から親と協同した児童デイサービスの仕事おこしが各地で立ち上がっている。また、中高生の放課後の居場所を協同労働で立ち上げた福岡春日の実践などが多くの注目を集めた。

子どもや親と接する中から見えてくるニーズを捉え、それを仲間や市民と共に仕事にしていき、地域の新しいつながりや活力を生み出していく、そんな仕事おこし、まちづくりの拠点に子育ての現場がなっていける新しい可能性が提起された。

3. 子育て支援から「協同の子育て」・「育ち合いの子育て」へ

今集会で大田堯先生から集会スローガンの「子育て支援」という言葉に触れ、「『支援』という言葉には『支援する者』と『される者』という感覚がある。みんなが独立した人格で協力し合う『協同労働の子育て』、みんなが『育ち合う社会』『育て合う人間関係』をつくるのが大事なのでは」という鋭い指摘を受けた。実はワーカーズコープの中でも「自立支援」「就労支援」「障がい者支援」など「〇〇支援」という言葉が多く使われている。それは、ややもすると、人間を「サービスを受ける側」と「する側」に知らず知らずに分けていく思想につながる可能性がある。また、市場原理の徹底した生活への浸透が私たちの発想にまでなってきていることにも警戒しなければならない。改めて協同労働の子育ての理念を深めていく必要がある。それは、子育ての市場化に対抗する運動の根っこになる子ども観、社会観を鍛えることとイコールである。

そんなことを気付かされた集会でもあった。

4. 大阪アトム共同保育園から学ぶこと

集会が終わった2012年3月20日、大阪府泉南郡熊取町にあるアトム共同福祉会が運営する二つ目の保育園である「つばさ共同保育園」の開園式に参加させていただいた。当日は小学生から社会人まで計7名の元ア

トムっ子が集合し、アトム保育園が自分の成長にとってどんな意味があったのかを一人ひとりの実感で伝えてくれた。

アトム共同保育園はその名の通り、共同の保育に徹底してこだわっている保育園である。特に、保護者と保護者、保護者と保育士の協同の関係づくりは深い。当日配布されたパンフレットの中にも「クラス懇談会、各行事を通じて子育てに限らず、しんどいことなど何でも言える、困った時に助け合い、卒園後もつながっていきけるような関係を作る」ことや、「共同の精神をモットーに支え合い、認め合える関係を作り、保護者の思い、保育士の思いを出し合う場(各種の懇談会)を活用し、子どもにとって最善のことは何かを考え合います」といった明快でわかりやすいアトムの理念が書かれていた。アトムで育った親の地域での活躍と卒園後も何か困ったことがあったらアトムと一緒にやってきた親同士が相談している様子など「親が育つ保育園」づくりを通じて一生もののつながりが熊取の地に広がっている。

そのアトム共同福祉会の理事長を長年やってこられた山本健慈現和歌山大学学長は、2010年に四国高松で開催された全国協同集会において、協同の子育てについて次のようなコメントを寄せている。

「人を理解し合うにはトラブルが一番良い。人は順調な時は本性を現さない。トラブルの時にはいろんな言葉、経験を絞り出して伝えようとする… 日々のトラブルをどう解決するかに理念がどう貫かれるか、

現場の実践はうまくいかないことが多いはず。トラブルがあるのは当たり前… 本当のトラブルの重ね合いの中で自分と他者が理解できるし、理解すると非常に心地よく生きられる。そのことを実感し、そういう生活の方がいいかなという大人をだんだん増やしていくことが大事なのではないだろうか… トラブルの中に分け入って血みどろになって解決しようという覚悟のある人がいないとコミュニティも協同もなかなか成り立たない」。

この指摘は今集会にも参加された、北海道べるの家の向谷地生良さんがいつも言われる「弱さの情報共有」や精神障がいを持った人が「普通の苦労を取り戻す」実践にも通ずる指摘のように思う。

困難やトラブルこそが人と人との協同性を高めるのであれば、今我々は覚悟を持って地域の困難の中に分け入り、時には途方に暮れ、ぶつかり合いながらも粘り強く当事者や仲間たちと協同の水脈を探っていくなくてはならない。東北の大震災から1年。金銭や経済的繁栄のみを追い求めてきた「戦後社会」から、人間・命、自然・コミュニティなどに価値を置く「災後社会」づくりに向け、協同労働の子育てが果たす、社会的使命の重さと確かな展望を共有し、多くの人に発信していきたい。

最後になるが、今フォーラムの開催にご尽力くださったこども未来財団の皆様を始め、会場を快く提供してくださった大東文化大学太田学長、また、お忙しい中全国から集まってくださった講演者、パネリスト、

コメンテーターの方々、そして、半年にわたる準備作業に、仕事が終わってから駆けつけ、汗を流してくれたワーカーズコープの仲間、実行委員の方々にこの場をお借り

して心から感謝させていただきたい。

「ありがとうございました」。

そして来年もまたお逢いしましょう。